加古川市文化財解説シート（石造美術10、通番第10号）

鶴林寺の宝篋印塔

かくりんじのほうきょういんとう

文化財愛護シンボルマーク

名　称	鶴林寺の宝篋印塔	所在地	加古川市加古川町北在家424 鶴林寺境内
別　称	鶴林寺の暦応二年宝篋印塔、鶴林寺石造宝篋印塔、石造宝篋印塔	所有者	鶴林寺
数　量	１基	指　定	兵庫県指定文化財
法　量	現高167㎝	指定分類	建造物
材　質	石造、花崗岩製	指定名称	石造宝篋印塔
時　代	南北朝時代、暦応２年（1339）	指定年月日	昭和45年（1970）３月30日

鶴林寺の宝篋印塔

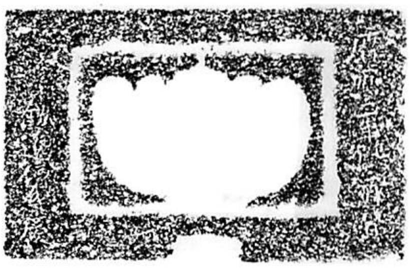
鶴林寺は、わが国の平安時代の建築を代表する国宝太子堂をはじめとする多くの優れた建築や、多数の文化財が伝わる古刹です。中世には、播磨の聖徳太子信仰の拠点として賑わっていました。

宝篋印塔とは、基礎、塔身、笠、相輪からなる塔の一種で、笠を段形につくり、軒の四隅の隅飾を立てた形をしています。宝篋印塔という塔の名は、宝篋印陀羅尼の経文を納めたことから名付けられているといわれますが、主に供養塔や墓碑として造立されています。

この宝篋印塔は、花崗岩製で、鶴林寺境内の西側、新薬師堂の裏に、他の墓碑や石碑と並んで東向きに建っています。相輪部が欠損していますが、造立当時は高さ七尺の大塔で、今までに何度か位置を変えていると伝えられており、はじめの建立場所は不明です。

二枚の厚さ17㎝の板石の基壇の上に建ち、基礎は、上部に中央複弁一葉の左右に間弁を配した反花を刻出し、各側面は輪郭を残して矩形を作りその中に内部が素面の格狭間を入れています。また、正面の下端の中央に奉籠孔が穿たれていることから、塔下に供養品が納められていたと考えられます。この基礎の正面左右の輪郭に「暦応二年己卯三月八日」「勧進僧□慶」の銘文があります。塔身は、各面の蓮華座上に月輪を置き、その中に金剛界四仏種子（ウーン／阿閦如来）、（タラーク／宝生如来）、（キリーク／阿弥陀如来）、（アク／不空成就如来）を配しています。笠は、下二段上六段の定型式で、隅飾はやや外方へ開き二弧輪郭付で内部はすべて素面です。相輪部の第六輪目以上を欠損しています。

銘文から暦応2年（1399）に造立されたことがわかるこの塔は、作風が優れており、材質が御影石の花崗岩であることから、鎌倉時代末期から南北朝時代に西摂石屋を中心に活躍し、南都系西大寺流新義律派と密接な関係をもっていた石工の伊行恒の作品と推測されています。



［基礎銘文］

暦応二年巳卯三月八日

勧進僧□慶

宝篋印塔（南東から）

鶴林寺（仁王門の南から）

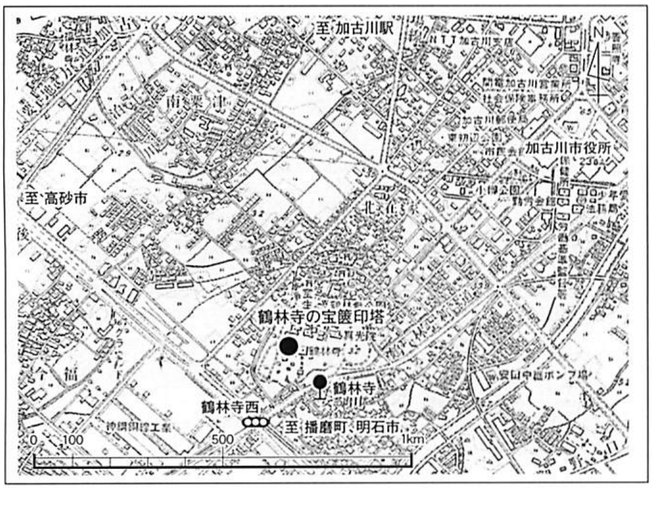
塔身拓本（左から、（ウーン）、（タラーク）、（キリーク）、（アク））

（拓本／『加古川市史 第7巻』から転載、文・写真／宮本）

［各部法量］

相輪…現高40㎝　笠…高45㎝・幅58㎝

塔身…高31㎝・幅34㎝　基礎…高51㎝・幅65㎝



●参考文献

『加古川市史 第7巻』加古川市（1986年）

『兵庫県大百科事典』神戸新聞出版センター（1983年）

『はりまの名刹―刀田山鶴林寺』兵庫県立歴史博物館（1991年）

『鶴林寺太子堂とその美』刀田山鶴林寺（2007年）

●キーワード

建造物、宝篋印塔、鶴林寺、聖徳太子、金剛界四仏、種子、蓮華座、暦応二年、伊行恒

●所在地／加古川市加古川町北在家424 鶴林寺境内

●交　通／ＪＲ加古川駅発かこバス別府ルート「鶴林寺」バス停から西へ徒歩１分

車は加古川バイパス「加古川ランプ」から南へ３㎞

編集・発行：加古川市教育委員会 文化財調査研究センター
平成24年3月20日（2012.03.20／1000）